

「授業改善のための学生アンケート」2022年度後期 顕彰授業における工夫

2022年度後期「授業改善のための学生アンケート」の顕彰授業における工夫をご紹介します。

【参考】 顕彰の対象となったアンケート項目は以下の7項目です。

- Q3 この授業に主体的に取り組むことができましたか。
- Q4 この授業の内容を十分に習得できましたか。
- Q7 教員の説明はわかりやすかったですか。
- Q8 教科書や配布資料など、教材は適切でしたか。
- Q11 学生の質問や相談に対して、教員の対応は適切でしたか。
- Q13 この授業の目的や到達目標を十分に理解できましたか。
- Q14 この授業の内容に興味を持つことができましたか。

< 顕彰授業 >

「子どものイメージ」 森下 みさ子教授（人間総合学部児童文化学科） 2022 火 5 後期

始まる頃には日が暮れて真っ暗な5限目ですが、人間総合学部の3学科が履修する学部共通科目のひとつなので80名ほどの受講生がいました。しかも、ようやく対面授業ができるようになった後期、3学科が集うことで生まれる「知的化学反応」を生で（！）実感してもらいたいと思いました。

① 「今、ここ」力を磨いて！

もしかしたら倍速で聴かれていたかもしれないオンライン授業と違って、生の人間のリズムで動いていく授業の良さは、提供される情報を受け取りながら「考える」ことができることです。「今、ここ」に集中することで、どの情報が大切かとらえると同時に、それを自分はどう考えるか、の両刀使いが可能になります。溢れている情報に流されないように「考える」こと、現代社会に出たときに役立つ力ですし、授業の対象となっている「子ども」自身が自ずと持っている力でもあります。「今、ここ」力を身に付けることを掲げ、よみがえった対面授業を活かすことを試みました。具体的には、毎回のテーマもそうですが、授業のなかでも「？」を投げかけて「考える」こと、ノートに要点だけでなく感じたことや考えたことを書き込んでマイノートを「育てる」ことを勧めました。

② 特別企画展の案内、のつもり

もちろん掲げるだけではだめで、受講生が「今、ここ」で「集中」して考えたいような材料を提供しなくてはなりません。「子どものイメージ」ですから、ピーターパンやハイジ、しんちゃん（『クレヨンしんちゃん』）、宮崎アニメの子どもたち等、受講生が自ずと関心をもつ映像は適宜とり入れました。ほかにも説明の部分でTV番組の録画やYouTubeの

動画（遠隔授業で蓄えました）にも助けてもらいました。絵巻や浮世絵や童画の「子ども」、児童文学や絵本に登場する「子ども」等の画像も、美術館の特別企画展を案内するような気持ちで、パワポを使って必要に応じて立ち止まりながら（対面の良さです）見てもらいました。その際、見るポイントを指示しておくことで、初めて見るものはもちろんのこと、慣れ親しんだ映像や画像も「再発見」しつつ「考え」ながら見ることができましたようです。

③ マナバに学ぶ

②を進める上でも、コロナ禍で修得したマナバコースのテクが役に立ちました。自他共に認めるデジタルオンチですが、基礎教育の先生方にていねいに教えていただいたおかげで、いくつかの機能を使って便利に楽しく進めることができるようになりました。特にレスポンは、学生の発見や感想・考えを私が受け取るだけでなく、その場で紹介する形で学生同士が学ぶ機会にもなったようです。自由記述の他にも選択機能を使って即座に円グラフを提示して解説するなど、私自身も発見し分析し考えつつ授業を楽しむことができました。あらかじめ仕込んでおくことができるので、どのあたりでスマホを出してもらうか、授業にメリハリをつけた準備もできます。少し時間を要する時は、その日のシンデレラタイム（深夜0時）まで開けておき、翌週の授業の初めに共有して解説を加えるようにしました。

④ 時々、インタビュー

その場で表示するレスポンの場合、匿名性が高いので意見を出しやすい反面、どの学科の人なのかはわかりませんし、もっと訊きたいと思ってもその先のやり取りができません。文字には現れない声のニュアンスや表情を受け取ることもできません。そこで、質問によっては（感染対策をしながら）何人かにインタビューをして回りました。3学科が混じる学生の意見は面白く、笑ったり、考え込んだり、答える人だけでなく、その答えを聞いた人の反応も含めて、教室の空気が活性化するのを感じました。

振り返ってみると、3学科の受講生に生じることを狙っていた「知的化学反応」は、私自身にも起こっていたようです。「子どものイメージ」を手がかりに文化・心理・教育のトライアングルの奥に人間の原点が在ることを、ますます実感することができました。また、当初はコロナ禍で強いられたことですが、それを潜り抜けてデジタルとアナログの両方を活用する道も開けてきた気がします。今後は、この二刀流の腕も磨いていきたいと考えています。

